

ヨーロッパ危機の震源地ドイツ

2016年12月3日慶応大学 EU 研究会

三好範英

1 『ドイツリスク』について

◇『ドイツリスク 「夢見る政治」が引き起こす混乱』（2015年9月出版）。取り上げたテーマは、ドイツメディアの体質、エネルギー問題、ユーロ危機、対中対露関係、ドイツの対日イメージ、歴史認識問題など。これらのドイツの対内、対外行動に通底するパターンを「夢見る」（価値>事実、当為>自然、Sollen>Sein、自然や非合理性へのロマンチズム、理想主義、先入観の強さ）というキーワードで分析しようと試みた。「リスク」とはエネルギー政策の非現実性、ユーロ危機、親中の外交の日本にとっての脅威、という意味で使った。

◇言い換えれば、「各国家は力の体系であり、利益の体系であり、そして価値の体系である。したがって、国家間の関係はこの三つのレベルの関係がからみあった複雑な関係である」（高坂正堯）に照らせば、力（政治、外交、軍事）、利益（経済）の問題も扱っているが、力、利益の問題自体ではなく、もっぱら価値の面（認識枠組み、振る舞い方クセ、行動基準、「常識」）から把握する試み、といえる。

◇詳細は本書に譲るが、福島第1原発事故のドイツメディア報道が極めてエモーショナルであったことに衝撃を受け、改めてドイツ、ドイツ人とは何か、を考えざるを得なかったことが出発点となった。

◇EU統合、ユーロに関しては、第3章「ユーロがパンドラの箱をあけた」が扱っている。ユーロ危機の背景にドイツ（ヘルムート・コール）の理想主義があるのではないか。さらにその背景にはドイツの負の歴史（ナチ・ドイツ、ホロコースト）に対する贖罪意識が大きく働いている。そもそもナチズムを生んだ思想史的背景の一つとして、ドイツが歴史的に育んできたロマン主義（夢見る）思想があると指摘した。

2 ヨーロッパの複合危機

◇拙著出版後に難民危機の本格化、パリ、ブリュッセルの大規模テロ、イギリスEU離脱が起きる。2009年以来のヨーロッパ危機の連鎖。ギリシャ債務危機、ユーロ危機、ウクライナ危機、難民危機、イギリスEU離脱（Brexit）、テロリズム、右派政治勢力の台頭はそれぞれ相互に関連した、ヨーロッパ複合危機に発展。

◇日常感覚からのヨーロッパ統合、大きく言えば国民国家の健在を感じた。イギリス、ブリュッセル、東ヨーロッパ、バルト3国、バルカン諸国、ギリシャ、ウクライナなどでの取材経験。

EUの日常化。ユーロは言うに及ばないが、豊かになった野菜、果実。ポーランドではEU予算による公共投資の現場にもしばしば遭遇した。東欧の急速な変化。ロシア語から英語へ。

他方、ヨーロッパ各国の差異の大きさ。ドイツ報道の大半が国内報道。フランス、ポーランドは外国。検問所はないが、国境を越えれば言語、景観、雰囲気はがらっと変わる。

EU機構の複雑さ（欧州評議会（審議会））、28もの欧州委員ポスト（デジタル単一市場、デジタル経済・社会・・・など細分化された職掌）、週休3日制？のEU職員。

国内政治の比重の高さ。EUへの権限委譲の躊躇、政治エリートと国民意識の乖離、報道されるのはEUの政策決定、規制と国内の施策の衝突（アウトバーンの有料化、CETA）。

ヨーロッパアイデンティティの未成立。

◇今始まったわけではない、私が実感したもともとあった多重の矛盾、亀裂。

○国家間

ナチ（ヒトラー）支配の過去とソ連（スターリンの）支配の過去。国家（ナショナリズム）に対する根本姿勢の違い（西と東）

経済、社会システムの根本的相違、緊縮財政と財政拡張（北と南）

海洋ヨーロッパと大陸ヨーロッパ（自由貿易と土地拡大）（斜めの亀裂。島嶼、沿岸と内陸）

○国内

建前のエリートと本音のマス、マスは右傾化

リベラリズムと保守（多文化主義とナショナリズム、homogeneity(Homogenitaet) と heterogeneity(Heterogenitaet))

国家の超克とナショナリズム

グローバル主義とヨーロッパ中心主義（保護主義、TTIP）

3 危機の震源地ドイツ

◇こうした元々ヨーロッパが孕んでいた多重の矛盾、亀裂がドイツの振る舞いにより、顕在化、拡大し、危機に至ったのではないか。何もかもドイツのせいにするのは極論だが、大きな要因の一つなのではないか。

◇ユーロ危機の根本原因は、やはり金融は統一したが財政はバラバラという構造的な欠陥にあるのではないか。通貨統合をステップに政治統合を実現しようという、コールの理想主義がこの不安定な構造を作り出した一つの要因。北と南の亀裂の拡大。

◇近年も理想主義的な単独行動（Alleingang, Sonderweg）が二つあった。脱原発方針の決定と難民上限なしの受け入れ。

脱原発決定と、それに平行する再生可能エネルギーの急速な導入は、周辺国の送電網に過大な負荷を与えているなどの弊害を生んでいる。今後、原発廃止が本格化するにつれて、ヨーロッパ・エネルギー需給システムの不安定化が進む可能性もある。

◇一方、難民の上限なし受け入れ決定は、多大な影響をヨーロッパ全域に与えている。ヴィシェグラード諸国の反発は国家観の違いが根底にあると見る。各国内の右派ポピュリズム政治勢力の勢力伸長は明らかに難民、移民問題を源泉とする。東と西の亀裂の拡大とヨーロッパ各国内の亀裂の拡大。

◇難民受け入れの理由は、いろいろ考えられるが、ドイツの「夢見る」政治とその背景にある贖罪意識が第1の要因。ドイツの国家の振る舞いを規定する「価値」を考えると、ナチズム（ホロコースト）の過去がおそらく最大の基底価値をなす（ホロコースト・アイデンティティ、*Nie wieder Auschwitz*）。

◇メルケルの個人的資質。プロテスタント牧師の娘。敬虔なプロテスタント。ただ、機会主義的などころもある。真意をつかむのは難しい。

◇斜めの亀裂の拡大。**Brexit** もドイツの難民受け入れ決定と、それに付随するヨーロッパの混乱が英国世論に与えた影響を無視できないのではないか。ドイツ主導の色彩を強める、理想主義的、中央集権的、官僚的、硬直的EUに、英国もそろそろついていけなくなった、とする見方もあり得る。

「英国の主流派の主流派の一部、エスタブリッシュメントにとってドイツが牛耳るEUはちょっと店じまいさせた方がいいのではないか」（中西輝政）。海洋国家と大陸国家、イギリス経験論とドイツ観念論の肌合いの違い。

4 今後のドイツ、EUと世界

◇英国EU離脱、トランプ候補当選のダブルショック。アングロサクソン世界の二つの国の「革命」。市場経済の矛盾が先端的に顕現したということなのか、あるいは矛盾に対応するためにいち早く舵を切った、というべきなのか。

◇これまで他国との間の自由貿易協定に最も前向きだったのが英国であり、英国なしのEUは、ますます集権的、官僚的、保護主義的なブロック経済に退行するか。

◇トランプを否定的に捉えるドイツ人90%超（トランプ+反米主義）。メルケルのトランプ当選時の声明。安倍首相の対応と対称的。米国離れが決定的に。難民政策、トランプへの対応を見るに付け、ドイツの「道徳帝国」化？ドイツがプラグマティックなアングロサクソンの価値から離れ、ますます理念的な「夢見る」国家になっていくようにも見える。

◇トランプの対露政策、制裁解除の追い風となるか。ドイツの経済的な対中国への依存度は少なくとも増す。とすると、全体的にドイツとドイツ主導のEUは、ますます「西」を離れ、「東」への傾斜を強めることになるのだろうか。

◇中東欧諸国のEUへの期待はまだ強い（財政支援の享受国、安全保障面）が、海洋国家の色彩が濃い国、EUのガバナンスに不満を持つ国（オーストリア）からEUを徐々に離脱し、将来的にEUは、ドイツに支配される中東欧の経済ブロックに縮小する、そんなシナリオもあり得るか。明日（4日）のイタリア国民投票、オーストリア大統領選やり直し決選投票の行方は。

◇英は米との関係を強化するか。逆にEUを離れ、政治的、経済的に弱体化する英国は、ロシア、中国傾斜を強めるか。日米英豪などが主軸の海洋国家ブロックと、独（EU）露中の大陸諸国ブロックの大きな2大ブロックに世界がまとまっていく、ということがあり得るか。